夕焼け通信 1340号　2022.2.7
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）86

木幡智恵美

ショートステイ（5）

ショートステイに移ってから少しずつ元気になり、食べ物の摂取量も増えてくると、夫に、「帰りたい」「もう飽きた」などと訴え、私が行くと、「あ、迎えに来た」などと言うようになった。何とか説得したり、気を逸らした隙に帰ったりしているうちに十二月に突入。新型コロナウイルス第三波のため、面会は個室でのみになった。

その頃、義母の身体に変化があった。夫の番の日、室内履きを持ち帰ってきたのだ。「体液が漏れて、びしょ濡れになってたんだって」。翌日私が行った時も左下肢にパッドを当てていた。体液漏れはその後ずっと続き、もう使わなくなった小さめのパッドを脚に当ててもらうようショートステイに持って行った。

「ここに居ることにしたわ。家に帰ってもぼうっとしちょうだけだけん」と言う日があれば、「みんな家に帰られる」とか、「牢屋に居るみたい」と呟くことも。義母なりに様々に思いを巡らしているのだろう。こんなに元気になったのは、ショートステイの皆さんのお陰だ。所長、ケアマネ、看護師、介護職員の方々が日々健康管理をし、要介護四の義母に合ったお世話をしてくださっている。動脈瘤があり、臓器に水が溜まっているだけでなく、下肢から体液が漏れ出すような状態では、とても自宅で世話をする自信はない。けれども、義母の気持ちを思うとまた頭から離れなくなり、夢によく出てくるようになった。ある時は大好きな風呂に入っており、ある時は部屋でテレビを見ながらお菓子をぼりぼり。

そうこうしているうちに、退院後一か月の受診日がやってきた。ショートステイに行くと、「夕べも遅くまで帰りたいと言っておられました」とケアマネさん。食事の摂取量、便通、熱、血圧、血中酸素など、日々の記録をプリントした紙を持ち、夫は自分の車で、私は義母と介護タクシーに乗って病院へ向かった。

主治医さんは、「目が全然違いますね」と、退院時とは見違えるような義母の姿に、開口一番そう言われた。体液が漏れることについて相談すると、「あえて気にしないことにしましょう。気にすれば入院して辛い治療をすることになりますから」と言われる。次の診察は三ヶ月後、家族だけで来てくださいとのこと。

がらがら橋日記

宮森健次

シャコバサボテン

あと二月もすれば父の一周忌を迎える。この一年は、住人のいなくなった実家のかたづけを一気に進めた。亡くなったのを合図にしたと思われるのもなあ、とご近所の視線が少々気になったりもしたが、少しでも間を開けるとうんと先延ばしすることになりそうで、区切りが付くまでは休むまいと決心して我ながら地道に取り組んだ。家の中は、子どもに「引っ越しするみたいだね」と言わしめるほどに思い切った。外回りは、自力というわけにいかず業者に依頼した。

「ほんとにいいですか。捨てちゃって。」

と大工さんたちに何度も念を押された植栽や盆栽も、ごっそりとかたづけてもらった。たった一鉢、あれもこれも積み込まれた軽トラから何の考えもなしに蝦蛄葉サボテンを抜き取っただけで。

工事が始まったのが秋だったので、それまでの半年は水遣りに通った。毎日見ていれば、ずぶの素人であろうと変化には気づくもので、痛んだ葉っぱを見つければ、父の残した道具を使ってチョンチョンと摘んだりした。それでも月日が経つにつれて、少しずつ色艶をなくしていくのを認めざるを得なかった。

時々、ご近所のお年寄りが通りかかったついでにぼくの隣で立ち止まり、「えらいねえ」だの「ご苦労様」だのとねぎらってくれたのだが、色が鈍くなり始めた五葉松の前では、

「やっぱり話しかけーもんがおらんやんなあとねえ…」

とつぶやくのだった。

自然はその美しさを人間に褒めてもらいたいのだ、そんなふうにうたった詩人のことを思い出す。父の慈しんだ植物たちをぼくのおざなりな眼差しで失望させてしまったってことなのかもしれない。だが、残念だけれど、ぼくは父と同じような関係をこの木々たちと作れそうにない。父が亡くなった時点で、木々たちの役割も終わったのだと思うことにした。

立春の前の日に、業者から施工終了の連絡が届いた。希望したとおり、家の周囲から植物も石も鉢もすべてなくなった。ブロック塀もなくしてがらんとした玄関先に立つと、思った以上にさっぱりした気分になった。

蝦蛄葉サボテンは、残したものの、世話をする意欲も知識もまるでなく、玄関に置いたままほったらかしだった。にもかかわらず、しばらくするとすべての葉先に花芽を付け深紅の花をびっくりするほどびっしり咲かした。いい加減な放任主義と相性がよかったものらしい。お見事、と言いたくなった。相手は、褒めてもらわなくても別に、ってところだろうけれど。

ニュース日記　818

中村　礼治

「医療権力」の後退

30代フリーター　やあ、ジイさん。新型コロナ対策を社会経済を止めない方向に切り替える提言を専門家が相次いで出し、それを政権が後追いしている、と朝日新聞が報じている（1月30日朝刊）。全員入院方針の見直し、濃厚接触者の待機期間の短縮に踏み切ったほか、感染が急拡大した場合は、感染の疑いがあっても、重症化リスクが低ければ医療機関を受診せずに自宅で療養することも可能とした。専門家らは外出自粛などによる「人流抑制」ではなく、感染リスクの高い場面での「人数制限」が有効との提言案をまとめたとも報じられた（1月21日朝日新聞朝刊）。

年金生活者　これまでコロナ対策で思うがままに振る舞ってきた医師会や病院業界など、私が「医療権力」と呼んでいる医療業界がオミクロン株の拡大で後退を余儀なくされたことを示している。

「人流抑制」から「人数制限」への転換については、翌日になって「各都道府県知事の判断により『人流抑制』を加味することもあり得る」という一文を加え、政府に出したと報じられている（1月21日朝日新聞デジタル）。

「外出自粛」を呼びかけている自治体などからの批判をかわすためと見られ、本音は「人流抑制」より「人数制限」にあると推察される。「外出自粛」を呼びかけても当初ほど国民が従わなくなっていることが背景にあり、国民の行動を制限する力がそれだけ弱まったと言える。

30代　案外もろいところのある「権力」だな。

年金　背景には資本主義の高度化とともに進んだ国家からの権力の分散という世界史的な流れがある。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化・デジタル化が企業（市場）への、資本のグローバル化が国連など国家間システムへの権力の分散を駆動した。

「医療権力」は国家権力とは別の権力だが、国家なしには成り立たない。医療機関の特権を保障する法の制定や医療従事者の養成などは国家が担っている。それは立法、行政、司法と並ぶ第4の権力と呼ばれるマスメディアが国家の存在なしには成り立たないのと似ている。「メディア権力」とも呼ぶべきマスメディアは国家の広報を担うと同時に、その振る舞いをチェックする役割を担う。3権が依存し合いながらチェックし合っているのと同様だ。

である限り、「医療権力」も「メディア権力」も、国家からの権力の分散とともに、おのれの一部が分散していくのは免れない。「医クラ」（医療従事者の集合を指す「医療クラスター」の略）とか「マスゴミ」といった両権力に対する揶揄、非難を含んだスラングの流布がそれを示している。

30代　受診しないで自宅療養も可能としたのは、条件付きながら、コロナを普通の風邪並みに扱うことに転換したことになる。

年金　国民を隔離、拘束し、生活の仕方を指図するなど、個人の自由を大幅に制限してきた「医療権力」がオミクロン株の拡大を前にして、そうした制限が自らの首を絞めることになるのに気づいた。

感染がさらに拡大し、たくさんの人たちが次々と医療機関にやってくれば、「医療逼迫」が避けられなくなる。それは「医療権力」の足もとを危うくし、力をそいでしまう。

これまでそれを防ぐ手段として「医療権力」がとっていたのは、国民に「外出自粛」などの行動制限を迫ることだった。「逼迫」しない医療供給体制の構築は放置してきた。既得権益を守り、自らの力を保つためだ。だが、いくら外出制限をしても感染の拡大は行くところまで行かないと止まらないことがわかり、国民も自粛要請に以前ほど応じなくなった。

そこへオミクロン株の急拡大が始まった。「自宅療養も可能」という言葉でくるんだ事実上の受診制限は、2年ものあいだ自らの変革を避けてきた「医療権力」がとった非常手段と言える。それはこの権力がこれまでのように国民の行動の仕方を指図することができなくなったことを意味する。

30代　そうした医療側の方向転換に岸田政権は追随しているわけだ。

年金　医療への信頼が厚いわが国民の多くは、「医療権力」の方向転換も支持するだろう。日本経済新聞の世論調査（1月28日～30日実施）では、新型コロナウイルスの感染症法上の分類を見直すべきかとの問いに対し、季節性インフルエンザと「同じ扱いにすべきだ」との回答が60％と半分を超えている。結核並みの隔離措置が必要な現在の位置づけを「維持すべきだ」は31％だった。世論を気にする政権としては専門家の提言に逆らうわけにはいかない。これまで「ゼロコロナ」路線をとっていたのも世論を気にしてのことだった。

ただ、受診なしの自宅療養には「感染が急拡大した場合」という条件が付けられている。これは見ようによっては、風邪並みの感染症でも国民を隔離、拘束し、自由を制限する余地を残しておこうとする「医療権力」の意思を感じさせる。

そうであっても、いずれコロナは風邪並みの扱いになるときが来る。それは「風邪並み」が証明されたときではなく、国民がそれを受け入れたときだ。それには「医療権力」によるお墨付きと政権による追認が条件となるだろう。